不定期刊行　　第416号　2011.10.10

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

三段紅葉の白馬三山縦走

この連休は、白馬三山に出かけた。先週半ばに稜線上では 40cmほどの積雪があるとの情報もあったが、学校から毎日様子を眺めてその融雪具合を見、また連休中の天気予報も参考に、大丈夫だろうと判断し、前日に行くことを決めた。

前日の7日は20kmのコースで行なわれた本校の44回目の強歩大会。ブーブー生徒に言われるのは癪だったので、僕も参加してフルコースを歩いた。案の定、「なんで強歩大会の翌日に！」と言う声を「僕も20km歩いたから条件は同じ！」とかわして7時半に学校を出発。今回の参加は2年生男女各1、1年生3人の5人。引率は2人、そこにヤズィックアグル峰遠征隊員で途中帰国した山内一成君に同行してもらった。山内君には、池工山岳部のコーチ役をお願いしており、7月の富士山にも同行してもらっている。

さて、前置きが長くなったが、総勢8人で栂池から入山する。連休初日のゴンドラ乗り場の込んでいることと言ったら・・・。しかし大部分はパノラマウェイを使って自然園まで。我々は、お金がない（片道3000円は高校生にはかなり高い）のでやせ我慢をして、ロープウェイには乗らず、10時30分に栂の森から歩き出す。生徒にとって2泊3日の縦走は、初めての経験になる。その上昨日の強歩大会で足が痛いとのたまう中、ロープウェイを横目に天狗原に向かう。成城小屋を過ぎ、ロープウェイの終点にたどり着くとそこから吐き出された観光客。それまでの静けさと一変。今年は急に寒くなり霜がおりたからか、あまり紅葉がきれいではないような気がする。自然園から登山道に入ると急に人は少なくなったが、それでも連休初日とあってそれなりに多くの人が歩いている。途中、石川県の山岳協会理事長の石森長博さんご夫妻に出会う。お互いに「こんなところで」というものの「山や」が山で会うのは、悪い気はしないもの。聞けば、大池のテン場はもうすでに色とりどりのテントで一杯とのこと。まあ、連休とあれば仕方ない。女子生徒が1名慣れない荷物で潰れたので、山内君に背負ってもらう。ありがたい助っ人である。結局テント場についたのは、16時30分。石森さんの言うとおり、テント場は満員状態。少し雲が出てはきたが、一日上々の天気、レイクサイドのテン場で生徒たちの疲れも一気に吹き飛ぶ。「明日は白馬三山の縦走と温泉だ！」とモチベーションを上げて、20時には就寝。生徒たちのテンションも高い。

9日は、文字通り強行軍となった。山内君がいればこその12時間行動。慣れない生徒が一人がいきなり歩き出しから不調で、足が動かない。股関節が痛いと言うことでカタツムリ山行となる。荷物を山内君と僕が背負い、ゆっくりゆっくり進む。大池出発は6時50分と予定通りだったが、10時5分にようやく小蓮華の頭。12時にようやく白馬岳に立った。北面の雪はところどころクラストしてはいたが、アイゼンが必要なほどではない。しかし、雪に慣れない生徒にとっては案

白馬岳直下を登る

外歩きにくいのだろう。消耗も激しい。このころから別の一人の生徒が遅れがちになる。白馬山頂からは360度のパノラマが広がる。生徒にとっては、剱のピラミダルな山容が特に印象深かったようで、何人かの生徒が今度はあそこに行ってみたいと言っていた。これは大きな収穫だ。遠くに見える槍ヶ岳や富士山の姿にも歓声があがる。

12:45 に村営小屋を出発。遅れがちの二人の生徒のこととこの先の遠さを考えてここで一泊ということも考えたが、生徒たちが入山前に「温泉」の２文字に妙にこだわっていたこともあり、山内君、またもう一人の顧問藤田さんとも話をし、遅くはなるが４時半ころまでには到着するだろうと読み、先に進むことにした。しかし、山慣れしていない生徒たちの疲労は考えていた以上に激しかった。全くペースがあがらない。それどころか落ちていくばかり。目の前の白馬鑓を見て、次第に言葉が少なくなっていく。しかし、誰一人弱音を吐く生徒はいない。「温泉」に行きたいと強気のことばが返ってくる。杓子を巻き終わり、鑓の登りにかかるころには、時間も経過し、14 時 30 分を回っていた。「暗くなるな」と思うと、岩場の下りがやや心配ではあるが、山内君もいるし、それなりの装備も持ってきているので、大丈夫だろうと先に進む。16:50、ようやく鑓の頭に立つ。しかし 2 人の生徒を除いてはまだ生徒たちは元気。これなら行けるかなと思いながらも、最悪は大出原で闇テンという手もある。まあ行けるところまで行こう、できれば暗くなる前に鎖場を通過したいとあせる気持ちを抑えながら進むが、どうしても 2 人の生徒がついて来られない。山内君と無線連絡をとり、善後策を話す中で、2 人の生徒には山内君と藤田さんがつき、残りの 3 名を僕がつれて先行することにする。

要所で連絡を取り合いながら、僕らが温泉沢に入る頃には月が昇り、夜陰が迫っていた。ヘッドランプを点けて降る。結局鑓温泉に着いたのは、18 時 25 分。真っ暗な中に 30 張り近いテントが張られていた。その数にはビックリしたが、そんな悠長なことを言っている場合ではない。疲れている生徒にテントを張らせ、すぐにお湯をわかし、夕食の準備をさせる。一応の段取りができた段階で、リーダーに後のことを任せ、19 時ころ僕がもう一度登り返す。およそ 10 分ほど登った鎖場の下で後発隊と合流。19 時 40 分に全員が無事にテントに到着した。テントではお湯を沸かし、米を炊き夕食のカレーを作り終えた 3 人が自らの疲労を口に出すこともなく、後からついたメンバーを気遣ってくれた。長い長い一日であった。夕食の後は、念願の入浴。疲れた生徒たちに、小屋じまいしたあとの温泉はかなり新鮮に映ったようであった。

朝起きて、テン場を見回すと、湯船の脇にテントは張っていたのは元山岳センター主事の藤松太一さん。これだけ大勢いれば知っている人が 1 人や 2 人はいるものだ。昨日の疲れもあったので、ゆっくりと食事を摂った後、読図をしながらゆっくりと下山。8:40 に出発し、12:00 に大日向のコル。14:30 にようやく猿倉到着。生徒はそれこそ疲労困憊であったが、初めての 2 泊 3 日、フル装備での縦走、しかも中日は 12 時間を越えるハードで、ヘッデンまで使うという貴重？な経験。それそのものは決して誉められることではないだろう。むしろ何かあったら真っ先に槍玉にあげられる行動だったのかも知れない。しかし、今回は顧問二人と助っ人の山内君の中には、不安はなかった。

10 月のこの時期、毎年悪天で何らかの遭難事故がある。今回も稜線上は積雪もあった。しかし、僕らは装備をもち、技術を身につけ、それに基づいた判断をできるということの上で、行動をした。生徒たちは、きっと明日また学校へ来て、厳しかったこの山行のことを語ってくれるだろう。一回り大きくなって。